

古墳の建築や謎について

3年4組33番 松本 優介

・はじめに

2019年7月6日、ユネスコ世界遺産委員会において、日本政府が推薦する「百舌鳥・古市古墳群」の世界文化遺産登録が決定された。そして2021の10月には、発掘調査がされた。けれども、このことがニュースに報道されても、まだ周りの人達は古墳の存在を知っているだけで認知はされていない。このままでは自分達の身の回りにある古墳を知らないことになる。そこで筆者は古墳のことについて調べようと考えた。しかし、いざ調べると、古墳の何を調べればいいのか分からずフィールドワークをしてみると、川の近くや田んぼの近くの山の付近に建てられていたり、そして建築の仕方だったり古墳はなぜ現代まで残っているのか、最終的に古墳の建築や立地について調べようと思った。

・序論

古墳とは、3世紀中頃～7世紀(1700年前～1300年前)の古墳時代に造られた墳丘を持つお墓をいい、地域を治めた王や有力者などが葬られたと考えられている。古墳には大きく分けて三つの期間があり古墳時代の前期、中期、後期に分かれている、三つの期間と古墳の作り方や形、どういう場所で作られているかがバラバラである。このことを踏まえて本論では話していきたいと思う。近年、この古墳の中でも有名なものは、大仙古墳(仁徳天皇陵)、石舞台古墳、西都原古墳群などの巨大古墳が挙げられるが、なぜそのような場所に古墳ができたのか、どんな目的で建てられたのか。和田晴吾氏の研究によれば、「日本の平地に立地する大型の古墳には、周濠がめぐることが多く満々と水を蓄えたものは近世の農業用水用の溜池として利用されていた」とされている。他には、考古学者・松本豊胤氏が「ため池造成や水田経営を積極的に進めた豪族たちが、自らが開発した地域を見渡せる場所に古墳を造営していった」と説明している。しかし、本来は雨水や湧き水が溜まる程度であったと推測されている。では、古墳の建築の方法について問題があるのではないかと仮説を立てた。そのために、先行論文に記載されている関連研究をもとに調べて検討する。ここで用いる古墳は土粘土が使われている奈良県の古墳を主に利用する。

・本論

客観的に見て、古墳を建てるにあたっての条件があることに気がついた。大きく分けて三つある。一つ目は主に川(大きく、海と繋がってる方が良い)の近くに古墳が多いということだ。ではなぜ川の近くに古墳が多いのかと言うと、遺跡や古墳とかは昔の人々の集落の跡だから人が生きるために欠かせない水や食料などがあったからだと推測されている。その他にも、川は重要な交通路でもあり、険しい山を避けるのにも便利な上、その影響で道や地形や地域が出来上がったとされている。二つ目は、主に穏やかな傾斜や広い土地が活用されていたということだ。その理由としては、古墳を作るための材料を運ぶ時に傾斜だと辛いから、おだやかな方が楽で、資源が周りに豊富にあったからだと推測されている。三つ目は、火山の噴火や川の流れなど、その土地の恵みを十分に活かして土地が作られその土地の上に古墳が作られていた。理由としては、図-1の坊の塚古墳(岐阜県)周辺の微地形図を見ると、少し灰色がかっているところがある。

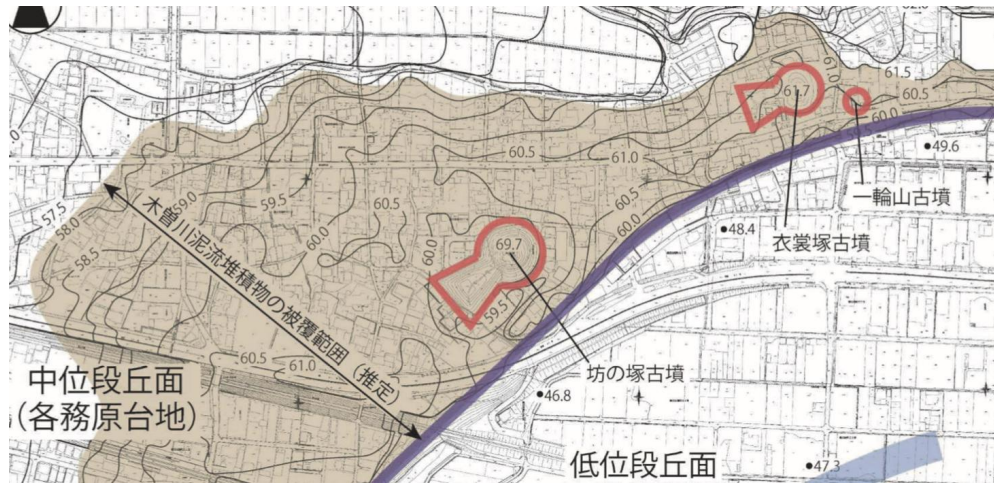


図-1坊の塚古墳周辺の微地形図

この灰色の部分、木曾川泥流堆積物である。木曾川泥流堆積物とは、かつて御岳山(3067m)の東側斜面に厚く堆積していた火山噴出物が、地震をきっかけに大崩落を起こし、木曾川を下って下流域へ再堆積したものである。この木曾川泥流堆積物を例に挙げると、火山灰や巨石が地盤として固まってその上に古墳ができたとされている。主にこの三つの要素から古墳を建てるのに適していると考えている。しかしこの条件は古墳の時代によって大きく異なることがある、だがここではこのことを考慮した上で条件に基づいて進めていく。次に自分の周りにある古墳を自分の条件に重ね合わせてみる、一つ目は奈良県の宝来山古墳(垂仁天皇陵)について考えた。

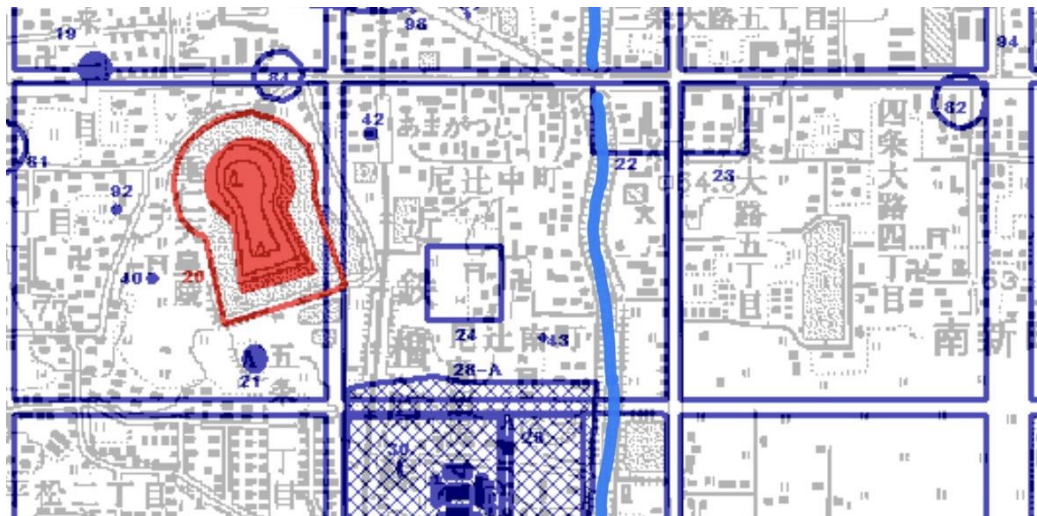


図-2宝来山古墳(垂仁天皇陵)周辺の地図

この図を見てわかる通り、中央から西に鍵状に囲んだところが宝来山古墳(垂仁天皇陵)である。全長227mの前方後円墳とされている。後円部径123m・前方部幅118m、3段築成で葺石・埴輪・周濠を備える。幕末に盗掘されており、その時の記録によれば長持形石棺が見つかったという。4世紀末～5世紀初頭に築造しているとされている。垂仁天皇が埋葬された陵墓として宮内庁が管理している。その隣に川が流れているのがわかる。この川は秋篠川と言い、川が近くにあることで一つ目の条件に当てはまる。古墳と川の距離が近いので物資を運んだり、村や集落があったことが考えられる。そのうえ地面が穏やかな傾斜の土地なので二つ目の条件にもあてはまり、土地が見渡しやすいところに作られたことから、相当位の高い人が眠っているとされている。



図-3杉山古墳の周辺の地図

二つ目は、大安寺の横にある中央の建物の上にあるところが杉山古墳である。全長約154mの前方後円墳。後円部は直径約80mを測り、葺石・埴輪・造出しを備える。周囲には盾形の濠がめぐる。内部構造、副葬品は不明。後円部中央に竪穴系の埋葬施設があったと思われる。5世紀中頃の築造。前方部では窯跡が見つかっており、奈良時代に大安寺へ瓦を供給していたとされている。見てわかる通り平地になっていて平城京という大きな集落もあったことから村が近くにありこれは一つ目の仮説に当てはまる。平地なので交通の要所が選ばれる場所に多い。時期的には古墳時代後期に多い。



図-4富雄丸山古墳周辺の地図

三つ目は第二阪奈道路の近くにある富雄丸山古墳である。直径約110m、国内最大の円墳。3段築成で北東部分に張り出し部分がある。南北を軸にした粘土槨が見つかった。京都国立博物館に丸山古墳出土を伝承する遺物が保管されており、角の欠けた碧玉製鍬形石の欠けた部分が古墳から出土した。4世紀後半の築造とされている。地図で見る通り下ら辺に山があり土地を生かした建て方をしているのでこれは三つ目の条件に当てはまる。垂仁天皇陵と杉山古墳はかなり平坦なところに作られているが富雄丸山古墳はかなり傾斜があるところに作られている。時期的には古墳時代後期に作られていることが多い。

次になぜ現在に古墳が残り続けているかについて検討する。それを奈良県を例に検討する。最初に思いつくのは、なぜ崩れないのかだったり、現代に残っているのかだと思う。最初はなぜ崩れないのかについてだ。古墳の墳丘の周りの掘られた部分に水をためて濠(ほり)になっていることもある。また、墳丘の斜面には、石(葺石・ふきいし)が敷きつめられているものもあり、装飾や墳丘の崩れの防止などが目的だと考えられている。また、墳丘が2段・3段になっているものや、濠が2重・3重になっているものもある。このようにして古墳が現代でも崩れないようにしているわけである。次になぜ現在まで残っているのかだ。これは奈良県を例に説明していきます。奈良県には、五条野丸山古墳(墳丘長約310m・橿原市)、渋谷向山古墳(同300m・天理市)、箸墓古墳(同280m・桜井市)など、大型の古墳が多くある。奈良県には古墳時代・飛鳥時代・奈良時代に中央政府がおかれていたので、奈良盆地一帯には有力者が多く居住していた。そのため、大型の古墳が多く残されていると考えられています。なお、奈良は「千年の田舎」といわれることがある。これは、794年に奈良から京都に都が遷って以来、千年もの月日が経ったという意味ですが、古墳などの遺跡にとっては、これが大きな意味をもちます。つまり千年もの間、開発などで荒らされることが少なかったため、そして現代では古墳などの遺跡がきれいな形で残っているのである。

・結論

この論文では、古墳の建てられるにあたっての仮説や条件を基に奈良県の古墳を調査をした結果、三つの古墳の内二つが二つ目の条件の主に穏やかな傾斜の土地で古墳が造られていることがわかった。その理由としては、主に天皇の眠っている古墳や権力者の古墳がほとんどであった。逆にいちばん少なかった仮説は三つ目の条件の火山の噴火や川の流れなど、その土地の恵みを十分に活かして土地が作られその土地の上に古墳が建てられたというものでした。なぜ少ないのかと言うと山の傾斜があつたりして建てづらくなったりするから、天皇などの権力者は町が栄えていた所に造るためとても目立ちにくいからだと思われる。

次になぜ古墳が崩れないのに関しては、古墳の墳丘の周りの掘られた部分に水をためて濠(ほり)になっていたり、また、墳丘の斜面には、石(葺石・ふきいし)が敷きつめられているものもあった。このような技術があるおかげで古墳時代から今にあたって古墳が受け継がれていると改めて実感した。

・終わりに

今回、三つの条件を提案し、奈良県の三つの古墳を自分の仮説と照らし合わせた結果、古墳は主に傾斜の緩やかな所で集落があり、資源があるところに多く造られている。このことは、その古墳を見ることによって大昔の地形を憶測として役立てられることが期待できる。今後は、古墳の地形をもっとより詳しく調べ、他にも条件があるかもしれないのもっと研究していきたいと思う。

・参考文献

西村 勝広 「土木史的に見た古墳築造の合理性と変化」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscejsce/74/1/74_1/_pdf/-char/ja

古墳マップ <https://kofun.info/kofunlistmap/29> 10月25日